

幸福の赤いサクランボ



今年のサクランボシーズン、当農園では出だしの佐藤錦の収穫を平年より4日早い6月17日に始め、7月6日にはすべての収穫を終えた。平年に比べると、5日程度早く切り上がった。

佐藤錦や紅秀峰など品種ごとの収穫はそれぞれ10日間ぐらいの短期間に集中して進めなければならず、毎年のことだが、まさに猫の手も借りた忙しさだった。

収穫期後半は、5年目になる「紅姫」販売用のサクランボを冷蔵施設に収納する作業も並行して行う。収穫から選別、箱詰め、発送、収納を午前3時から午後9時

海外へ販路拡大を模索

ごろまで交代で担当し、なんとかこなすことが出来た。

今年はシーズン当初に、香港と



台湾へ試験的に輸出してみないか、というオファーがあり、「紅姫」を海外展開する足掛かりに出来るような気配も加わった。現在、金山町で計画している新農場なども販路を拡大と並行して海外へ

県などもサクランボの輸出に向けた検討を始めているが、課題の一つは、輸出先の販売態勢の確立だ。傷みややすい商品だけに、冷蔵

で送っても店頭で販売するのは難しい。個人や法人から、贈答用などとしてあらかじめ注文を受けて、発送する方式が良いと考えている。受注・販売の態勢を現地

室温1・5度の中、「紅姫」用の箱詰め作業が進められる。山辺町の多田農園

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1畝のサクランボ園を経営する。

つくる必要があると思う。

輸送時間を考えると、中国や韓国が輸出先として最適だと思うが、両国とも検疫や高関税などの問題があり、サクランボの輸出は事実上難しい状態になっている。

昨年の中国訪問で、経済成長が著しい中国社会では、山形のサクランボに対するニーズは、かなりあるのではないかと感じた。

農産物の貿易自由化をめぐる様々な意見があるが、中国と韓国の市場を開くことができれば、日本農業全体の未来は明るいのではないか。繁忙期のピークを少し越えた今、そのように考えている。